あとがき（寄せ書き風に）

（有田尚史）

私は会に参加して後、一時茨城に転勤しておりましたが、また東京に戻ってきたときに会員の皆様が「おかえりなさい」と言って迎えてくれたことに感激しました。一〇年間一緒に活動してきた友情はかけがえのないものになりました。今後この活動にたくさんの若い力の参加を呼びかけ、絆をつなげていけたらと思います。未来の大田区を輝かせてくれることを期待します。自分もそのお手伝いができればと思っております。

（岡茂光）

「蒲田モダン研究会」入会のひとつの目的は、当時の蒲田が本当にモダンな街だったのかを確かめるためだった。それは真実か、幻影か？ 結論は得られなかった。蒲田のライバル、大森はハイカラと称されているらしいが、それはまさに腑に落ちる。ひょっとすると蒲田の街はモダンとは程遠く、映画俳優、監督目当てに蒲田を訪れた人たちがモダンだったのかもしれない。故小沢昭一さん曰く「蒲田は場末のエネルギー」。「モダン」と「場末」の大きなギャップ。ミステリアスな街・蒲田は格好な研究材料だ。

（奥田和子）

大田区に生まれ、育ち、住み続けているのに地域のことは何も知らずの十年前でした。実家の菩提寺が蒲田の妙典寺で曾祖父の時代、屋号を「蒲田屋」と名乗り大森で乾物屋をはじめたことで元々は蒲田がルーツだと思っていましたので、「蒲田」には少なからず思いはありました。そんなわけで「蒲田モダン研究会」に参加して、魅力あるまち「蒲田」を知ることが出来たことと、何より研究会に集うメンバーとの出会いが私の宝になりました。

（久保田雅人）

「蒲田モダン」をキーワードとして、色々な視点で歴史や文化を紐解いていくという、この研究会への参加は、それまで知り得なかった多種多様な事象を知る喜びに溢れたものでした。その活動の中で、私のライフワークである、日本の西洋音楽受容史という視点で、発表の機会を与えていただいたことは、大変ありがたいことでした。微力ながら、蒲田モダン研究会の活動に花を添えられたのだとしたら、望外の幸せです。

（栗原洋三）

この研究会がここまで続いたことに驚きですがひとえに事務局、奥田和子さんのお陰です。

一番の想いでは戸塚の大倉陶園から鎌倉への街歩き、天気に恵まれ福野さんはじめ皆さまの楽しそうな笑顔が脳裏に焼き付いてます。

（黒澤学）

大倉陶園の蒲田時代のことを本格的に調べるきっかけをつくってくれたのは蒲田モダン研究会です。本当に感謝しています。

（幸田順平）

モダン研究会で何を発表しようか考えたとき、かつて自分が仕事上で体験したことと蒲田とのつながりで「蒲田行進曲」を取り上げました。研究発表と言うより、よもやま話になってしまいましたが、「蒲田」という大田区の地名が一九八〇年代に再び全国的に有名になったいわれが少しでもわかればいいかなと思い、わかりやすい記述にしました。

（髙橋明紀代）

戦後、父が疎開先から工場を羽田に求め、この町で育ちました。小学1年生の頃には蒲田の闇市や映画街で映画を楽しんでいました。特に、闇市の独特な活気や蒲田映画街に大勢のファンが押し寄せた熱気が、八〇歳目前のいまも映画や芸能好きの原点だなと感じています。

（田中正司）
海苔屋（海苔漁師）時代から、今の地元で一番変貌したのは、特に新しく白砂を運び入れた「大森ふるさとの浜辺公園」でしょうか。あの臭かったガスタンクのあった頃を思い浮かべると、信じられない思いでいます。今回、記事を書くにあたっては、何十年も前のことですから、記憶も曖昧な所もあり、郷土博物館、大森海苔のふるさと館には何度か足を運び、担当の方には何かとお世話になりました。ありがとうございました。

（田中隆）
どなたも一家言ある輩の集まりでありながら懐深い抱擁力、さすが大人の集団。題材も蒲田を中心に幅広く、毎回趣向を凝らしたテーマ。話の後はその余韻を残しながら懇親会に突入！ 我々夫婦は自宅が横浜なので一次会で早々に退散。が、〝地〟の方々はその後さらに盛り上がるらしい（高齢の方も多く、ちょっと心配）。分野も年齢も違う色々な方々と巡り会えたことに心から感謝。鍋谷さん、お誘いアザース！
ただ、カラオケで「君が代♪」は余り披露しないほうがいいかも・・・。

（栃木彩来）
顔を出すようになった当初、自分が育って住んでいる街について何も知らなかった事に愕然としました。
知れば知るほど面白くなっていった蒲田。地図の読み方が変わり、仕事も街歩きも楽しくなっていきました。旅先での過ごし方も変わりました。
立ち止まりながらマイペースに歩き続けること。
蒲田モダン研究会の人生の先輩方から教えていただいた人生を一〇〇倍楽しむ方法です。

（鍋谷香）
蒲田モダン研究会は、人数が足りない時に招集がかかり参加していました。そんな蒲田モダン研究会の会員とは言えないような私が、お店がある久が原のまちゼミでお伝えしている手ぬぐいの講座をやることになり、蒲田モダンとは何の関係もない（と思う）のに、原稿を依頼され、あとがきまで頼まれて困惑しましたが、素敵な本に出来上がると思うと、関わらせていただいてよかったなと思っています。

（鍋谷孝）
「研究会やりましょう。」 二〇〇八年、奥田和子さんの思いがけない一言から、栗原洋三さんと出会い、一緒に研究会が始まりました。多士多彩多様なメンバーの方々との出会いは、蒲田の街の消えた一面に光を当てたことと同じくらいの光をもらった気がしています。
この記念誌は、「研究会メンバー」との出会いに感謝の記念誌でもあると思っています。

（新倉太郎）
鍋谷兄のお誘いで、二〇一一年二月に蒲田モダン研究会に入会しました。そしてその直後に三・一一。その後、今日まで災害支援ボランティアにのめり込みながらも、蒲田モダン研究会の集まりは楽しかったです。講座もその後の〝裏モダン〟も。そして一〇周年記念誌を作ろう、と云う段になり、そのお手伝いができて光栄でした。みなさんから寄せられた玉稿が早く書籍になる日を楽しみに編集作業にちょびっと力が入りました。よき諸先輩に囲まれていい仕事ができたと思います。ありがとうございました。そして、光写真印刷の東さん。さまざま適切な助言をいただきました。感謝します。

（廣瀬達志）
たまたま「オニタビ工業」の歴史を研究し、当会でも発表させてもらいました。ここから気付いたことは、日本の近現代の歴史が、京浜工業地帯や蒲田の歴史とつづれ織りの様に密接に関連していることでした。その後は蒲田の産業を中心に明治以降の政治、経済状況や成長、技術革新、文化、芸術、外交、戦争、行政などの項目とを付け合わせてみるという作業を続けました。それらを月一回発表す

る日々。楽しい一〇年でした。

（福野幸雄）

記念誌の四ページをいただき、まさに「枯れ木も山の賑わい」、にもならなかったと恥じ入っています。蒲田界隈の新しいことに前向きに挑戦する気風や雰囲気に惹かれていて、意外にも、故郷である京都や、現住所の馬込とも似ているところがあり、そのあたりの接点を小文にさせていただきました。

（三橋昭）

蒲田で仕事をするようになって一〇数年、それまで蒲田は羽田空港を利用するバスの発着駅との認識しかありませんでした。ところが蒲田が、実は下町風なエネルギーに包まれているだけではない、魅力が重層化している街であることを知り、大好きになって今に至っています。

（宮川達雄）

私は会の幹部である鍋谷氏のお誘いで参加させていただきました。「大人の見る繪本　生まれてはみたけれど」をきっかけに戦前の映画の中毒になってしまい、当初は大田区や城南の古い景色を発見するのが目的でしたが、花形俳優が演じている理想の物語ではあるにせよ、昭和初期の世相、環境、都市、建築、人の振る舞いを感じ取れる貴重な資料だと思います。YouTubeで見られるものもたくさんあるので是非ご覧になってください。

（村上多恵子）

蒲田モダン研究会が一〇周年記念誌を作ると聞き、イラストを描くことでお手伝いしたいと、志願しました。そして、イラストマップを作るという大役を仰せつかりました。描き上がったものをあらためて見ると、蒲田の地図の中に、メンバーの方々の思いが、所狭しと詰まっているような気がします。見た人が、いつのまにか蒲田という街に引き込まれてしまう、そんなイラストマップになっていれば、嬉しいなと思います。

（吉沼雄一）

蒲田モダン研究に入り一年ほどして、かつて勤めていたＴＤＫ六〇周年記念史をもとに、大田区にある色々な資料を区役所、図書館、郷土博物館等探しました、特に地図や古いラジオの資料を揃えたのを思い出しました。また横須賀街歩きは当時自分が散歩していたルートに横須賀人文博物館があり江戸時代から明治時代について、学芸員の方の解説が印象的でした。

東京計器（株）の歴史については父から断片的に話を聞いたことがあり、零戦の部品を製造していたことや、朝鮮池（現東京蒲田病院）の話を聞いたことがありました。メインは一〇〇年史、一一〇周年史、一二〇年史を基に作成いたしました。

ここに改めて、お礼申し上げます。お貸しいただき有難うございました。最後に父より聞かされていた事を断片的ではありますが、紹介させていただきます。

父がまだ少年期の頃、蒲田撮影所の俳優さん達にかわいがられていたのと（誰かわかりませんが）又エキストラで出ていたようです。亡くなったのちに父が書いたメモが見つかり、蒲田撮影所のことが記されており、撮影所の中におでん屋さんに友達がいたそうです。

（米川雅子）

映画「やわらかい生活」との出会いは必然だった。当時の自分を振り返ると、何処にいて何をしていても私は私だと言い聞かせながらも完全に自分を見失ってた（笑）　まずは映画との出会いに感謝。そして、原稿を書きながら浮かんでくる蒲田で出会った沢山の顔、そのお一人お一人に感謝を込めて書きました。最後に、どんな時も在りのままを受け入れてきた街・蒲田がこれからもそう在り続けることを願い「ありがとー蒲田！」です。

（五〇音順に表記しました）